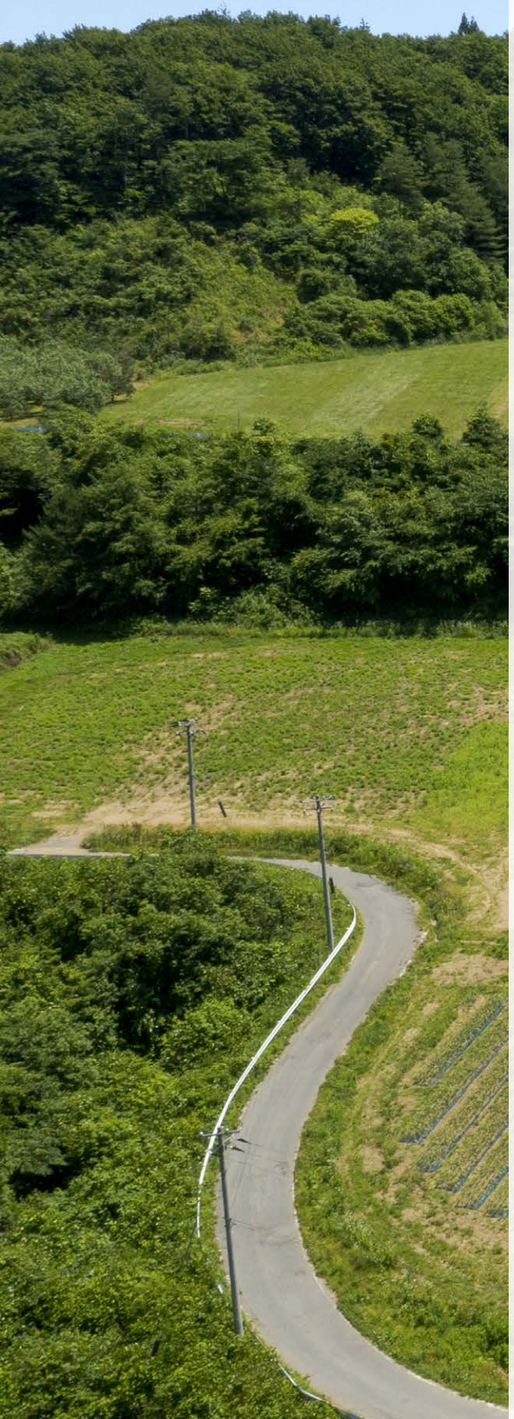
令和６年度

農山漁村女性活躍表彰

受賞者
取組資料集

令和６年度
農山漁村女性活躍表彰

受賞者
取組資料集



目次

1 はじめに
2 資料集の目的
3 表彰の概要
表彰部門の紹介
4 審査委員プロフィール
5 審査委員長全体講評
6 表彰式開催報告

7 令和６年度受賞者紹介
8 德永 順子 福岡県みやま市
9 大田原市農業委員会 栃木県大田原市
10 農業生産法人 株式会社 よしだや 青森県三戸町
11 小林 千歩 栃木県那珂川町
12 横田 友 埼玉県秩父市
13 公益社団法人 大野市シルバー人材センター 福井県大野市
14 株式会社 カネイファーム 徳島県藍住町
15 和田 梢 大分県豊後大野市
16 ONE SLASH 株式会社 滋賀県長浜市
17 特定非営利活動法人 SCR 宮城県富谷市
18 井本 慶子 鳥取県境港市
19 佐藤 美登子 北海道厚沢部町
20 両開漁業協同組合 女性部 福岡県柳川市
21 株式会社 漁村女性グループめばる 大分県佐伯市
22 福嶋 求仁子 熊本県合志市
23 三浦 悦子 宮城県気仙沼市
24 山梨きら星ネット 山梨県南アルプス市
25 株式会社 アグリシアJAPAN 千葉県富里市
26 合同会社 十色 埼玉県さいたま市

27 参考資料

はじめに

「農山漁村女性活躍表彰」は、我が国の農山漁村の女性のいきいきとした活躍やその環境づくりについて優れた活動を行う個人や団体を表彰しています。その取組は、創意工夫にあふれる唯一無二で魅力的なものです。また、これまでの受賞者の皆様にアンケートを実施したところ、受賞後の変化として「地域での認知度が高まった」「自分の活動に対する周りの人の理解が深まった」といった声をいただいております。このように、本表彰を通して女性の農山漁村における活躍を体現した日本全国の多様な取組を多くの方に知っていただくとともに、農山漁村の女性自身や女性の活躍を後押しする地域の関係者の方々がさらに自信を持って活動を進める一助となれば幸いです。今回、本年度の受賞案件をすべて収録した「農山漁村女性活躍表彰受賞者取組資料集」を作成しました。農山漁村の女性の活躍推進に向け、是非参考にしていただき、広くご活用いただくようお願いいたします。

令和７年３月
農林水産省経営局就農・女性課

資料集の目的

本資料集では、「令和6年度農山漁村女性活躍表彰」の受賞者による多彩な取組を広くご紹介しており、本資料集を通して、農山漁村における女性がさらに活躍できる環境づくりが増えるよう、また、農山漁村の女性の取組の幅が広がっていくきっかけになるよう作成いたしました。農林水産業に従事される方、自治体関係者、地域リーダーのほか、農業委員会や農業法人、女性の起業支援に携わる方々、女性農業者グループ、及び農山漁村における女性の活躍推進に関心のあるすべての方の参考になると幸甚です。

本資料集を通じて、女性自らが地域活性化等に取り組む事例や、女性が活躍できる環境づくりをしている団体等の取組を知っていただき、その上で、各事例の背景や工夫点を、自らの地域や組織の状況に合わせて検討し、実践に移す際のヒントとしてご活用いただければ幸いです。また、本資料集は、自身の取組の充実や団体活動のレベルアップ等に向けた参考資料や個人のキャリア形成のヒントとしても活用できる内容となっておりますので、ぜひご活用ください。

表彰部門の紹介

《令和６年度 表彰部門》

A 女性地域社会参画部門（個人）

農山漁村の女性が中心となった地域の農林水産業の振興や、農山漁村の活性化のための活動を中長期に渡り積極的に実施している個人の取組。

B 女性地域社会参画部門（組織）

農山漁村の女性が中心となった地域の農林水産業の振興や、農山漁村の活性化のための活動を中長期に渡り積極的に実施している組織の取組。

C 女性起業・新規事業開拓部門

農山漁村の女性が中心となり、女性ならではのアイディア等に基づき、地域資源を活用した起業活動や輸出、スマート農林水産業、農福連携等の導入により女性が農林水産業経営に積極的に参画し、新規事業・部門等を設立し概ね５年以内に経営上の成果を上げている取組。

D 女性活躍経営体部門

キャリア形成・能力開発に関する取組や、育児・介護等に関する就業規則等の整備など女性が働きやすい環境整備に取り組むとともに経営方針等に女性が参画し、実践している概ね直近５年以内の農林水産業を営む経営体の取組。

E 若手女性チャレンジ部門

農林水産業の振興及び農山漁村の活性化のための活動等を積極的に実施し、かつ、今後地域の農林漁業の発展を担い、リードすることが期待される概ね45歳未満の女性による概ね直近5年以内の取組。

F 地域子育て支援部門

農林漁業者及び農林漁業団体が自ら行う、又は、農林漁業者及び農林漁業団体が都道府県・市町村・民間団体等と連携し行う、農山漁村の特色・課題を踏まえた地域の子育て支援、児童・学童の健全な育成に資する取組。

審査委員プロフィール

岩崎 由美子
福島大学 行政政策学類 教授

埼玉県生まれ。早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。住民主体の計画づくり、農山村地域活性化、震災からの地域復興、農村女性起業などを研究。主な著書として、『食と農でつなぐ福島から』（岩波書店、共著）、『小さな自治体の大きな挑戦－飯館村における地域づくり』（八朔社、共著）、『成功する農村女性起業』（家の光協会、共編著）など。

五條 満義
東京農業大学国際食農科学科 准教授

全国農業会議所に8年間勤務後、1997年に東京農業大学専任講師。助教授を経て准教授。日本農業法学会副会長。伝統野菜の大蔵大根の復興を応援。著書に『家族経営協定の展開』(筑波書房)、『中国の大学と農村は今』(東京農大出版会)、『家族経営協定最前線』(全国農業会議所)など。過去に内閣府男女共同参画会議専門委員、政府の第2～4次の男女共同参画基本計画策定作業に加わる。

小川 理恵
一般社団法人 日本協同組合連携機構（JCA）
基礎研究部長 主席研究員

一般社団法人日本協同組合連携機構（JCA）基礎研究部長主席研究員。博士（農学）。1997年に、前身である社団法人地域社会計画センターに入会。総務課長、企画調整室長を経て研究職に職種転換、現在に至る。研究分野は地域づくりと女性活動。主な著書に『魅力ある地域を興す女性たち』(農文協、2014年)、『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』(共著、家の光協会、2021年)、『ダイバーシティJA だれもが活躍できる地域をめざして』（共著、全国共同出版、2024年）

平田 真一
有限会社 平田観光農園 代表取締役

1965年8月長野県生まれ。広島大学法学部卒業後、落合経営会計事務所に入社。その後、有限会社平田観光農園に就職。2006年7月に同取締役社長に就任、川西地区果実共同加工組合代表就任。2010年7月に長野県中野市に、株式会社果実企画を設立、取締役就任。2016年12月に株式会社イチコト設立、取締役に就任。2020年4月に川西地区果実共同加工株式会社を設立、取締役に就任（すべて現任）。全国農業会議所が事務局を務める経営者組織「農のふれあい交流経営者協会」副会長。

原 ゆきこ
税理士法人 共同経営センター 社員税理士

1968年生東京都出身。東京大学農学部農業経済学科卒業。夫の仕事に伴い、1998年より香川県在住。主婦業に専念した後、会計事務所に入社。学生時代よりの憧れだった農業経営者との触れ合いの中で、税理士資格の取得を決意。現在、顧問先は農業法人が多くを占めている。日本政策金融公庫の上級農業経営アドバイザー試験合格者、香川県新規就農・農業経営相談センター登録専門家として様々な農業経営者の相談に応じている。

池本 博則
株式会社ユニークピース 代表取締役社長

徳島県出身。2003年株式会社マイナビ入社。2016年同社執行役員 地域活性事業部長となり、2017年8月より農業情報総合サイト『マイナビ農業』を立ち上げる。日本の農業振興について官民双方へのサービス提供を通し取り組んだ。その後2023年5月末でマイナビを卒業し、2023年6月より株式会社ユニークピースを創業。現在も農業をテーマとした民間企業の事業開発や官公庁自治体における農業施策の支援など幅広く農業振興に取り組む。

審査委員長全体講評

「農山漁村女性活躍表彰」は、農林水産業及び農山漁村の活性化、農林水産業経営や政策・方針決定への女性の参画推進、次世代リーダーとなりうる女性の農林水産業への参入などの優れた活動を行っている個人や団体を表彰し、女性が農山漁村でいきいきと活躍できる環境づくりに役立てることを目的としています。

審査委員6名が審査基準に基づき厳正な選考を行い、結果的に以下の最優秀賞（農林水産大臣賞）が決定されました（F 地域子育て支援部門は受賞なし）。

A 女性地域社会参画部門（個人）では、福岡県の徳永順子さんが受賞されました。徳永さんは、2002年に農業委員になり、2016年に農業委員会会長に就任しました。会長就任後は、毎月１回農業委員会総会後に勉強会を実施して委員一人一人の疑問点や意見を吸い上げ、任期満了した委員にはエピソードを添えた手紙を渡して労をねぎらうなど男性委員を巻き込んで皆が楽しく活動できる体制をつくりあげました。また、菜の花栽培による遊休農地の解消、「菜の花オイル」の開発のほか、市の環境審議会委員として生ごみを活用してバイオマスセンターで生成される液肥の農業への活用を進めるなど、資源循環のまちづくりにも寄与されています。さらに、2022年からは土地改良区理事に就任し、農地中間管理機構関連農地整備事業を活用して、全国屈指の約60ヘクタールの大規模区画整備に取り組み、地元特産品「山川みかん」の産地承継に尽力されています。

B 女性地域社会参画部門（組織）では、栃木県の大田原市農業委員会（代表　荒井一夫さん）が受賞されました。栃木県では、昨年の「とちぎ女性農業委員の会」に引き続いて同部門の受賞となります。大田原市農業委員会では、2021年に女性農業委員で「チームあゆみ」を設立し、初心者向けの農機具講習会やSNSを活用した農業経営スキルアップ講座、農業女子との意見交換会など、女性農業者の「今の声・現場の声」を反映した事業に取り組んできました。その活動の背景にあったのは「女性農業者への支援をさらに手厚いものにしたい」という委員の思いであり、女性農業者はもとより男性農業者からも賛同や共感の声が集まっているそうです。地域計画作成においても、話し合いが男性農業者のみの参加に偏ることがないよう女性農業者にも声掛けをして参加を促し、ファシリテーターの役割も務めるなど、農業委員会活動の活性化にも大きく寄与しています。

D 女性活躍経営体部門では、青森県の農業生産法人株式会社よしだや（代表　吉田清華さん）が受賞されました。にんにくに特化した同社の経営を支えている従業員は7割が女性であり、管理職にも女性を起用するなど女性活躍の取組が積極的に展開されています。吉田さんご自身の出産・育児の経験を生かし、1時間単位で取得できる休暇制度や短時間勤務制度、育児介護休業制度を整備するほか、効率的な作業環境を整備し、各種免許や資格を取得する研修制度を充実させるなど、働く人それぞれの特性に合わせた職場づくりにも取り組んできました。その結果、「一緒に働きたい」という人が集まるようになり、雇用労働力の安定的確保につながっています。吉田さんはワーキングホリデー制度によってニュージーランドのぶどう畑で働いた経験があり、いろいろな国の人が一斉に作業する大規模農場での仕事は、シンプルで合理的な作業環境のあり方を実践的に学ぶ機会となったそうです。

E 若手女性チャレンジ部門では、栃木県の小林千歩さんが受賞されました。「農家の嫁になって憧れの田舎ライフを」という夢をもっていた小林さんは、念願かなって大規模米農家に嫁いだものの、休みなくずっと働いても利益が少ないという現実に直面しました。農作物の価値は適正であるべきだ、そして消費者に農業をもっと身近に感じてもらいたいと思うようになった小林さんは、いちご栽培にチャレンジします。「完熟にこだわったおいしいいちごを消費者に直接届けたい」という思いからインターネット販売を導入することで売上を大幅に伸ばし、近隣保育園のいちご狩りや中学生の職業体験受け入れなど農業の魅力を次世代に伝える活動にも積極的に取り組んでいます。「引きこもり農家の嫁」だったかつての自分が、いちご栽培を通して「よくばりでハッピーなバリキャリ農家の嫁」になり、さらにこれからはどんな新しい「農家の嫁」になれるのか心躍らせておられるそうです。

以上の農林水産大臣賞のほかに、15事例が経営局長賞や水産庁長官賞、林野庁長官賞、全国農業協同組合中央会長賞、全国漁業協同組合連合会長賞、大日本水産会長賞（今年度より新設）などを受賞されました。とくに今年度は、A女性地域社会参画部門（個人）で、農業委員会の会長を務めるなど地域社会で重要な役割を担っておられる方が複数応募されており、どなたを最優秀賞とするか選考過程で頭を悩ませました。委員会で議論を尽くした結果、環境まちづくりや土地改良区理事として活動の幅を広げておられる徳永さんを大臣賞として選出しましたが、農林水産省経営局長賞を受賞された横田友さん（埼玉県）、農山漁村男女共同参画推進協議会長賞を受賞された福嶋求仁子さん（熊本県）・三浦悦子さん（宮城県）も、農業委員会会長として活躍されているほか男女共同参画や地域活性化に向けて目覚ましい取組をされていることをここに記しておきたいと思います。

上記で紹介した事例以外にも素晴らしい活動が数多くあり、農業・農村の持続性を高める上で女性たちの取組はかけがえのない価値を生み出しており、こうした取組を広く発信していくことの重要性を改めて認識いたしました。

最後に、本表彰事業に取り組んでくださった方々、また、各県や市町村、関係機関等のみなさまに厚くお礼を申し上げ、審査講評とさせて頂きます。

審査委員長　**岩崎 由美子**

表彰式開催報告

令和6年度農山漁村女性活躍表彰受賞者表彰式は3月6日、東京大学弥生講堂一条ホールにおいて令和7年「農山漁村女性の日(※1)」の関連行事として、「未来農業DAYs2025」(※2)内にて行われました。

未来農業
DAYs 2025
ホームページ

未来農業
DAYs 2025
開催レポート

※1　詳細は27ページに記載
※2　「未来農業DAYs」は、若手農業者や女性農業者の優れた取組や農業に関心のある方々の革新的なアイディアを表彰することで、未来の農業を担う中心となる若者や女性の取組等を広く社会に発信することを目的としています。

令和６年度受賞者紹介

最優秀賞

農林水産大臣賞 女性地域社会参画部門(個人)
福岡県 みやま市　**徳永 順子**

農林水産大臣賞 女性地域社会参画部門(組織)
栃木県 大田原市　**大田原市農業委員会**(代表:荒井 一夫)

農林水産大臣賞 女性活躍経営体部門
青森県 三戸町　**農業生産法人 株式会社 よしだや**(代表:吉田 清華)

農林水産大臣賞 若手女性チャレンジ部門
栃木県 那珂川町　**小林 千歩**

優秀賞

経営局長賞 女性地域社会参画部門(個人)
埼玉県 秩父市　**横田 友**

経営局長賞 女性地域社会参画部門(組織)
福井県 大野市　**公益社団法人 大野市シルバー人材センター**(代表:小野田 理夫)

経営局長賞 女性活躍経営体部門
徳島県 藍住町　**株式会社 カネイファーム**(代表:矢野 正英)

経営局長賞 若手女性チャレンジ部門
大分県 豊後大野市　**和田 梢**

経営局長賞 地域子育て支援部門
滋賀県 長浜市　**ONE SLASH 株式会社**(代表:清水 広行)

林野庁長官賞 女性地域社会参画部門(組織)
宮城県 富谷市　**特定非営利活動法人 SCR**(代表:村上 幸枝)

水産庁長官賞 女性地域社会参画部門(個人)
鳥取県 境港市　**井本 慶子**

優良賞

全国農業協同組合中央会長賞　女性地域社会参画部門(個人)
北海道 厚沢部町　**佐藤 美登子**

全国漁業協同組合連合会長賞　女性地域社会参画部門(組織)
福岡県 柳川市　**両開漁業協同組合 女性部**(代表:田中 恵美子)

大日本水産会長賞　女性地域社会参画部門(組織)
大分県 佐伯市　**株式会社 漁村女性グループめばる**(代表:小谷 晃文)

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞　女性地域社会参画部門(個人)
熊本県 合志市　**福嶋 求仁子**

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞　女性地域社会参画部門(個人)
宮城県 気仙沼市　**三浦 悦子**

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞　女性地域社会参画部門(組織)
山梨県 南アルプス市　**山梨きら星ネット**(代表:齊藤 眞知子)

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞　女性活躍経営体部門
千葉県 富里市　**株式会社 アグリシアJAPAN**(代表:津田 乃梨子・津田 壮一郎)

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞　若手女性チャレンジ部門
埼玉県 さいたま市　**合同会社 十色**(代表:サカール 祥子)

女性地域社会参画部門（個人）
最優秀賞
農林水産大臣賞 受賞

徳永 順子 福岡県みやま市

やる気スイッチは、押しつ 押されつ！
人を巻き込み、地域を輝かせる農業委員

現在進行中の課題や取組

令和6年に、みやま市の女性副市長（当時）、女性市議、女性農業委員、JA女性理事及び女性農業者が一堂に会し情報交換。女性の役職者を増やすための方策を検討。また、近隣市町の女性農業委員の自発的組織「えくぼの会」で連携の輪を広げ、全国の女性農業委員の活躍を後押ししたいと各方面からの講演依頼を受け、各地で講演会を開催。地域資源を最大限活用し、人を巻き込み、地域が潤い、みんなが笑顔になる活動を続けていきたい。

農業委員会会長として、また農業者として地域の課題解決と資源循環のまちづくりを推進

結婚を機に就農。徐々に主体的に農業に取り組むようになり、平成14年に農業委員に就任し、農業振興計画策定委員会等で積極的に活動。平成28年に「農業委員会を変えてほしい」と当時の委員に背中を押され会長に就任。一つ一つの活動を丁寧に積み上げた結果、男性委員側の意識にも変化が現れ、現在は、互いに連携しながら、楽しく活動を続けている。農業を続け農地を守ることは、地域だけでなく地球全体にも貢献することにも魅力を感じ、約22年にわたり農業委員を務めている。

●地域課題の解決と有効活用

遊休農地での菜の花栽培を推進し「菜の花オイル」を商品化した。地元のJAみなみ筑後へ働きかけ、資金面や販路拡大等の諸問題を解決し、現在約4haで年間約6tの菜種を生産し、オイルに加工、市の特産品として「菜の花オイル」約1tが販売されている。みやま市は令和元年からふるさと納税返礼品として採用し、学校での食農教育や学校給食に使用することで地産地消に役立てている。現在は「菜の花オイル」につづく新商品として、黄からし菜やセロリを活用した「粒マスタード」や「セロリラー油」を試作している。

●資源循環のまちづくり

平成30年にバイオマスセンターが建設され、みやま市の環境審議会委員として、資源循環のまちづくりに尽力した。生ごみのメタン発酵過程で生成される液肥の有効活用に取り組み、水稲収穫後の田で液肥を使った菜の花を栽培し、菜種を収穫、そして菜花の茎や根をすき込んで米、麦、大豆を育てる好循環が生まれている。近年高騰する肥料費の削減にも効果を発揮。液肥は市民に無料提供する等により資源循環の輪が家庭菜園にも広がっている。

いつか誰かがではなく、今こそ私たちが

みやま市の特産品である「山川みかん」の産地継承を目的とした園地整備発起人会に参加し、土地改良区理事としても奔走。令和4年に農地中間管理機構関連農地整備事業の採択を受け、全国屈指の約60haの大規模区画整備に取り組み、中心経営体への利用集積を実現。女性の感性を活かしたアイデアや視点で「やりがいのあるみかん経営」を実現すべく奮闘中。

評価ポイント 農業委員会の会長に就任後、男女共同参画の視点を定着させ、多様な運営方式を実現した。総会後の勉強会の実施や、任期満了者には感謝の手紙を送付するなど、一つ一つの活動を丁寧に積み上げ、農業委員会の可能性を広げた。特に、男性中心の意思決定文化のあり方に新たな視点を加え、具体的な手法で新しい運営モデルを築いたことが印象的。さらに、環境政策とも調和した取組を展開し、農業委員会の活動の意義を全国に発信。性別を超えた地域活性の先進的事例である。

女性地域社会参画部門（組織）
最優秀賞
農林水産大臣賞 受賞

大田原市農業委員会（代表：荒井 一夫） 栃木県大田原市

女性農業委員の挑戦が、地域を変える

現在進行中の課題や取組

女性農業委員グループ「チームあゆみ」の活動

「チームあゆみ」は、地域農業の発展と女性農業者の社会参画支援の一助になりたいとの思いで活動を行ってきた。固定観念にとらわれないバランス感覚の良い活動は、県内外を問わず認知されており、活動の事例発表や視察研修の依頼が多数ある。女性、男性の性別を問わない農業者の支援活動はもとより、今後は、新規就農希望者の就農相談や農業経営の自立につながる活動の強化を思案している。就農への後押しとなることと次期農業委員及び農地利用最適化推進委員候補者の発掘を狙って、令和7年度に「チームあゆみ」は、大規模な講演会開催を予定している。

大田原市HP

女性農業委員の登用推進、地域の活性化に向けた取組

大田原市は、令和4年3月策定「おおたわら男女共同参画プラン」に基づき、女性農業委員登用率を国が設定する目標よりも高い30%とする目標を掲げている。この実現に向け、令和3年に女性農業委員で構成される女性農業委員グループ「チームあゆみ」を設立。女性農業者の支援や情報共有の場を提供している。

●「はじめての農機具取り扱い講習会」毎年実施

「チームあゆみ」の主要な取組として、令和3年に「那須野農業協同組合」をはじめ、「JAなすのサービス」、「JAなすのアグリサポート」の全面協力の下共同で農機具取り扱い講習会事業をスタート。当初は、女性限定の講習会としていたが、令和5年からは男性も参加しての初心者向け「はじめての農機具取り扱い講習会」を開催。安全な農作業の実現に向けた知識共有に役立てるため、講習会の様子をドローンで撮影し、YouTube上で公開するなど、情報発信にも力を注ぐ。

●「農業女子のつどい」

女性農業者同士のネットワーク強化のため令和4年から「農業女子のつどい」事業を実施。農業における課題や展望について意見交換を行い、直面している課題の抽出や情報を共有することで参加者同士の新たな人脈の形成と、今後の農業経営の方向性を見出すきっかけとなった。合わせて農業委員の活動内容の周知に努め、次期農業委員候補者の発掘を行い、女性農業委員の登用数増加につなげている。

●「農業経営スキルアップ講座」

「農業女子のつどい」で出された意見や課題から発展した事業で、令和5年からInstagramを活用した農業経営スキルアップ講座を東洋大学経済学部と共同開催。農業者の情報発信力向上による販路拡大や経営力向上を支援。これらの取組により、生産している農産物を効果的にPRし、取引成立に繋がった農業者もいる。

女性農業者の社会参画推進と性別を超えた協力

「チームあゆみ」の活動は性別を問わず「今の声・現場の声」を聴取して事業を開催している。実施する事業では必ずアンケートを行い、参加者からの意見や感想、今後の要望などを聞き、その結果を次回の事業開催に反映をしており、その取組はブラッシュアップした内容となっている。農機具取り扱い講習会やInstagramを活用した実践的な講座は、参加者の育成と技術向上に寄与しており、女性参画推進と同時に男性も含めた大田原市農業委員会のインクルーシブな活動として広がりを見せている。

●女性農業委員の拡充と次世代育成

女性農業委員の登用率向上を目指して、候補者の発掘及び大田原市女性団体連絡協議会や大田原市食生活改善推進協議会などの地域団体との連携を強化。また、「チームあゆみ」の事業や活動に男性委員も参加をすることで委員会全体に一体感が生まれ、男女共同参画の意識が向上している。また、「チームあゆみ」の活動が広く地域に認識されてきたことにより、その相乗効果として、次期農業委員選出に向けた取組が進められている。

評価ポイント 農機具講習会の名称を「はじめて」とすることで、男性も参加しやすい環境を整え、男女が共に学ぶ場を広げた。女性農業委員登用率30%を目標に掲げ、女性の活躍を推進。「チームあゆみ」の存在も支えとなり、取組を加速させた。さらに、女性たちの集いで生まれたアイデアをもとに、Instagramを活用した農業系スキルアップ講座を実施。女性がつなぎ役となり、地域に広がりを見せ、男女が一体感を持ちながら学び合う場を創出している。

女性活躍経営体部門
最優秀賞
農林水産大臣賞 受賞

農業生産法人 株式会社 よしだや（代表：吉田 清華） 青森県三戸町

新たな農業の“わくわく”を創造する「にんにくのよしだや」

現在進行中の課題や取組

令和6年4月、八戸市ににんにく料理専門店「にんにくバルよしだ家」をオープン。消費者に直接自社製品を体験してもらう場として、ブランド価値向上を目指している。

Instagram @yoshidayagarlic　HP

Facebook　YouTube

ニュージーランドでの経験を活かし、農業に対する新たな発想を生み出す

高校・大学で語学を学び、ワーキングホリデー制度を利用してニュージーランドへ渡航。大規模ワイナリーでの労働経験を通じ、シンプルかつ合理的な農業スタイルを学ぶ。平成14年に就農し、父の始めたにんにくの水耕栽培を手伝う。全国の市場へ営業を展開しながら、青森県産にんにくの価値を見出し土耕栽培にも挑戦。試行錯誤を重ね、高品質なにんにくの生産に取り組む。平成19年に法人化。生産から販売まで一貫した経営体制を構築し、にんにくの一次加工を開始した。平成30年に社名を農業生産法人株式会社よしだやに変更し、代表取締役に就任。令和5年に青森県農業経営士に認定され、現在、地域農業を牽引する存在となっている。

女性も働きやすい環境づくり

●労力軽減や作業時間の短縮の取組

現在、従業員の約7割を女性が占めている。このように、女性従業員が多いことから、トラクターやフォークリフト等の農業機械で作業ができる環境を整え、誰もが作業できるよう改善している。また、収穫後のにんにく乾燥では、コンテナの積み上げをフォークリフトで完結するよしだや独自で開発した縦型方式を導入し、作業負担の軽減と効率化を実現。また、JGAPやHACCPの理念や手法を学び、作業の標準化と快適な職場環境づくりに力を入れる。

●育児・介護世代への支援

従業員の育児や介護等の両立を支援するため、1時間単位の有給取得制度、短時間勤務制度に加え、育児・介護休業制度も導入。令和5年には女性専用更衣室と休憩スペースを整備。従業員のライフステージに応じた柔軟な働き方を可能にしている。

●免許資格等をサポート

人材育成にも力を入れ、各種免許・資格取得を支援。大型特殊免許、フォークリフト運転免許、小型車両系、HACCPコーディネーター、土壌医検定などを取得する従業員が増加。また、新規就農者の研修やインターンの受入れを行うなど、農業に携わる若者や女性の育成に積極的に取り組む。

地域に貢献し持続可能な農業経営を実現

地域の耕作放棄地を活用しながら有機肥料を使った土づくりに取り組むなど、環境に配慮したにんにく栽培を行っている。また、福祉施設やシルバー人材センターと連携し、これら施設利用者の就業機会の創出にも貢献。身体的・精神的なハンディキャプに配慮し、個々の能力を活かす環境整備に取り組む。さらに、女性の管理職への登用や、柔軟な労働環境を整備することで、持続可能な経営を実現している。

評価ポイント　地域社会への貢献と多様な人材が活躍できる環境づくりに優れ、女性が働きやすい職場環境の整備や農福連携の推進に尽力。柔軟な勤務制度や研修を導入し、地域課題と向き合いながら新たな可能性を切り拓いている。経営面では、生産から加工・販売までの一貫体制を確立し、JGAPやHACCP認証の取得を通じた品質管理の強化、ブランド価値の向上にも成功。持続可能な農業経営のモデルを築き、地域農業の発展に貢献している。

若手女性チャレンジ部門
最優秀賞
農林水産大臣賞 受賞

小林 千歩 栃木県那珂川町

よくばりな私がハッピーなバリキャリ農家の嫁になるまで

現在進行中の課題や取組

いちご農家になる道のりは簡単なものではありませんでした。知識ゼロからのスタートで周囲の方々にとにかく聞いて、技術を身につけていきました。「子供たちとの時間を犠牲にしてまで始めたことは絶対に無駄にしてはいけない」という母ちゃん根性で前を見続けました。

私の経営の中での大きな転換ポイントが令和2年からネットショップという販路をはじめたことです。一人いちご農家を始めて数年、早朝から夜遅くまでクタクタになるまで働いて気がつくとただ利益を追求する農家になっていました。「私は何のためにいちご栽培を始めたのか？」そうだ、私は農業で収益を得て自立したかったんだ、だけど私は母であり、嫁であり、そんな時間がとれる自分に戻るにはどうしたらいいのか。「家族の時間が欲しい」そのためにはお手伝いしてくれる人が欲しい、そのためには売上を上げて人件費を出せるようにならなくてはいけない、と経営を見つめ直し、栽培規模はそのままで単価を上げることを目標にしました。そのタイミングで農業女子仲間がネット販売を勧めてくれて、すぐ実践。最初は慣れないことから意図せずクレームをもらったり、配送に気を使ったりお客様との直接の連絡の多さから新しい苦悩に悶絶もしましたが、ネットショップをはじめたことで仕事の内容が変わり、納品や出荷といった移動時間がなくなり、事務仕事や梱包作業が新たに増え、ただその分売上も上がったため選別作業にアルバイトでママ友を雇えるようになりました。

Instagram @chiho.kobayashi.1105　Instagram @chihonoichigo　食べチョク

夢を叶え、いちご農家になる

幼少期から農業に憧れ、高校・大学で7年間農業を学ぶ。「農家の嫁」になるという夢を叶えたが、想像の100倍汗をかいても利益は僅かという現実に直面。持続可能な農業の形を模索する中で、第3子出産後に一念発起し、知識ゼロからいちごのハウス栽培をスタート。先輩農家の助言や県による研修の参加を通し、栽培技術を習得。農業と子育ての両立で多忙な日々を過ごす中、「家族との時間を大切にしつつ、農業で自立したい」という強い思いから、本格的に経営を見直し、令和2年にインターネット販売を開始。これにより、販路拡大と単価向上により経営が安定し、その結果、パート雇用の創出にもつながった。また、天敵を活用し農薬散布回数を減らしたり、有機質肥料にこだわって栽培したり、安全・安心で高品質ないちごを生産している。

●インターネット販売を活用した経営改革

インターネット販売の成功により、売上はインターネット販売開始から3年で2.6倍に成長し、女性農業者のロールモデルとして注目されている。方針として、「量を増やす」のではなく「価値を高める」ことに着目。多様な客層とニーズに応じ、ギフト仕様やメッセージカード対応等、柔軟な販売戦略を展開。お客様との直接のコミュニケーションを大切にし、リピーターを獲得している。

自立した農家の嫁は新たな価値創造に挑む

いちご農家として経営を軌道に乗せた後、令和6年に法人化。夫や夫の両親と経営の役割を分担し、より持続可能な農業へと進化。法人化と同時に米のブランド化に向けて、新たな販路を開拓中。いちご・レモンの施設園芸と米を統合し、家族経営から経営体としての発展を目指している。さらに、栃木県主催の女性農業者向けアグリビジネスセミナーや交流会に参加し、先進農業者を訪問しながら、経営の見直しやマネジメントスキルの向上にも努めている。

●農業の可能性と魅力を発信し未来の担い手を育てる

いちご狩りイベントに地元園児を招待。また、中高生や新規就農者の研修を積極的に受け入れるとともに、農福連携にも取り組む。農業経営における女性の活躍の場を広げるため、県の女性農業者ネットワークにも参加。作物を作って売るだけでなく、消費者とつながり、価値を伝えることの大切さや魅力を発信。農産物を通じて「幸せの輪」を広げ、農業の担い手育成を目指している。

評価ポイント　農業経営に新たな視点を取り入れ、工夫を重ねながら前進している点が魅力的である。特に、新規就農間もない中でデータ管理と栽培を結びつけ、効率的な農業の実践に挑戦している姿勢は、これからの農業の可能性を広げるものとなっている。また、家族経営から法人化への発展を積極的に進めており、その挑戦が周囲に良い影響を与えている。農業分野で新たな可能性を切り拓き、自らの経験を積み重ねながら成長し続ける姿は、多くの人にとって励みとなる。

女性地域社会参画部門（個人）
優秀賞
経営局長賞 受賞

横田 友 埼玉県秩父市

女性の地域社会参画を秩父市から全国へ!!
～秩父市初の女性農業委員 奮闘記～

現在進行中の課題や取組

都市住民との交流の場作りと更なる女性参画推進

令和2年に立ち上げた、築100年の古民家を改装した農家レストラン兼民泊施設をさらに軌道に乗せ、地域の人々が気軽に立ち寄れる場所を作っていくとともに、社会参画経験が乏しい女性農業者が外に出ていくきっかけを作り、更なる女性参画を目指していきたい。
また、女性農業委員の登用推進についても引き続き活動の先頭に立ち、こうした機運の働きかけをリードしていくと同時に、後進の育成も行い後押しを継続していきたい。

移住そして未経験から農業経営

東京都から埼玉県秩父市へ移住。平成8年に義父の農業経営を継承。農業未経験から地域の農家の協力のもと技術を習得し、現在は水田33a、畑40aで水稲・野菜・果樹を栽培。農産物直売所などで漬物や総菜を販売し、地域とのつながりを深めている。

遊休農地の再生

農業を営む中で耕作放棄地の増加や女性農業者の社会参画の遅れに危機感を抱き、自ら解決に乗り出すことを決意。平成20年に「栃谷ふるさとづくりの会」を全戸参加で結成。ボランティアグループと協力し、遊休農地の再生に取り組む。竹の伐採や整地作業を行い、1haの棚田を復活。菜の花、ひまわり、とうもろこしなどを栽培し、都市住民との交流イベントを開催することで、遊休農地の解消と活用を推進している。
また、平成21年から自身が会長を務める秩父市農業委員会の女性農業委員の発案で、地域環境の向上と土づくりを目的に、景観形成作物「ヘアリーベッチ」の栽培導入を後押し。展示圃を設置し、普及活動を展開した結果、1.26haの耕作放棄地の解消に成功。地域の環境整備にも貢献している。

女性農業委員の登用30%を目標に

女性農業者の社会参画を阻む要因として、伝統的な性別役割意識の根強さを実感。女性が農業経営や地域の方針決定に関わるためには、家族や地域社会の理解が不可欠と考え、まずは女性が集まれるコミュニティづくりに尽力した。

平成18年、県内の女性農業委員全員が参加する「埼玉県女性農業委員協議会」を設立。女性が立候補しやすい環境を整え、議会推薦を推進し、研修会を開催することで、女性農業委員の増加を後押し。秩父市農業委員会では平成17年に秩父市初となる女性の農業委員に就任、7期21年の活動を経て、令和5年に女性初の会長となり、会長として女性農業委員の登用を促進し、令和6年には女性委員数を30%まで引き上げることに成功。
全国の女性農業委員が連携する「全国農業委員会女性協議会」の会長も務め、農業委員に占める女性割合30%の達成を目標に、研修会や要望活動を展開。女性農業者の役職登用促進を進める。

評価ポイント 全国の農業委員ネットワークの会長として、女性の活躍を後押しし、農業分野での共同参画を推進してきた。その活動は全国規模にとどまらず、地元・秩父でも女性農業委員として実績を積み重ね、地域に根ざした取組を進めている点が素晴らしい。また、土地改良区の分野にも積極的に関わり、その功績は大きい。全国と地域の双方でリーダーシップを発揮し、女性の活躍の可能性を広げてきた姿は、多くの人にとって心強い存在となっている。

女性地域社会参画部門（組織）
優秀賞
経営局長賞 受賞

公益社団法人 大野市シルバー人材センター（代表：小野田 理夫） 福井県大野市

大野市の6次産業化はまかせて！
シルバー世代の女性が大活躍

現在進行中の課題や取組

令和3年4月、大野市にオープンした北陸最大級の道の駅「越前おおの荒島の郷」にある、飲食テイクアウト店「ココ・のーそん」を活用し、地元食材を活かした手作りの大野の味を、もっと広く知っていただき大野市のファンを増やしていきたい。また、令和7年も大野市が行う「ワンハンドグルメ」事業に参画し、特産の里芋を使用した新商品「里芋でんでん」と「恋もちゃん」で大野の食をPRしていきたい。

HP　Instagram @coco.no_son　Instagram @ono_silver

高齢者の就業の場を広げ、地域主導で活躍

大野市シルバー人材センターは昭和63年の設立以来、作業請負と就業機会の提供という枠を超え、独自の経済活動を通じて新たな事業を生み出し続けている。平成8年、会員の就業機会確保とシルバー事業のPRを目的とし、マンパワーを活かした4つの独自事業をスタート。現在は全体で18の事業を展開し、うち13の事業が農村地帯の立地を生かした独自の6次産業化事業である。特徴は、依頼を待つだけでなく、仕事を自ら生み出し、拡大を図ってきた。令和5年度末の会員は579名、6次産業化関連の独自事業に属する会員は219名、うち女性が154名で約70%を占める。※独自事業とは、会員の創意と工夫により自ら企画・立案し、実施する事業であり、公共・民間・家庭から請け負う受託事業とは異なる就業の形。会員に就業機会の提供を行う。

困ったら、とりあえず大野市シルバー人材センターに相談

高齢者の経験やスキルを活かし、柔軟な就業機会を提供している。6次産業化に注力し地域資源を最大限に活用。収益を生む事業モデルを確立し、雇用創出と地域経済の活性化に寄与。高齢者が地域の要望に応じた活動を行うことで、生きがいと社会貢献の場を提供している。

女性が活躍する独自事業と6次産業化の取組

●女性や高齢者が活躍し、6次産業化モデルを構築

- 農作物の生産（栗、里芋、苗物、野菜、米）
- 加工・飲食店での加工品・食品提供、農産物の直売事業
- 地産地消の取組、食品ロスの解消
- 昔ながらの手作りの味を商品化（味噌、梅干し、かきもち、栗赤飯、鯖の熟れ鮨し）
- 地元食材にこだわった、飲食店メニューの開発と提供
- 集出荷から配送まで担う配送事業

これらの取組を連携して行う6次産業化の仕組みを形成したことで地域経済の好循環をもたらしている。配送事業では、農産物や食品の効率的な集出荷体制を構築し、女性や高齢者の負担を軽減、参画を促している。また、就業時間を午前と午後に分けローテーション就業を取り入れるなど、女性が働きやすい仕組みづくりを心掛けた。

●推進する主な取組と成果

平成26年度に生産から販売まで一貫して行う6つのグループによる「ねんりんグループ」を形成。販路拡大のため、直売所での販売やイベントへの出店を強化し、地域ブランドの向上を図る。「稼ぐ力」の向上に係る事業の一環として市や観光協会のイベント「ワンハンドグルメ」に参画。令和6年に特産の里芋と舞茸をメインにした「は～といも舞茸コロッケ」の販売を開始。若い世代の来店が増加した。
農産物直売所等では「おもてなし講座」を開催し、観光客受入力向上にも取り組む。食育の一環として、栗園に保育園児を招待し、収穫体験を毎年実施。市内有終南小学校からの依頼により給食食材の納入、また市内2高校の購買（軽食販売）も担う。
市内のイベントには積極的に参加し、地元の農林産物や加工品の販売を通じて、地域の魅力を発信している。

評価ポイント 従来のシルバー人材の枠を超え、自ら意志決定を行い、工夫しながら形を作っていく点が印象的である。単なる労働力の提供にとどまらず、主体的に関わることで地域社会への貢献を深めており、特に、農業生産から加工・販売までを手がける6次産業化に積極的に取り組み、女性がその原動力となっている。これまでのシルバー人材に対するイメージを一新し、経験と技術を生かしたやりがいのある場づくりを実現していることが、多くの示唆を与えている。

女性活躍経営体部門
優秀賞
経営局長賞 受賞

株式会社 カネイファーム（代表：矢野 正英） 徳島県藍住町

医療の管理体制を農業に応用し、女性を中心にいきいきと働きやすい職場環境へ

現在進行中の課題や取組

農業と福祉の連携強化と地域と共に発展を目指す

令和2年にグループ会社で福祉事業所「チームカネイ」開設。障がい者の就農機会を作り、自立支援を行うことで、農業で活躍する人材育成に取り組んでいる。また、県内の若手生産者と協働し、野菜卸会社「株式会社菜々屋」を設立。さらに、直営の農家レストランを開業し、新たな販路の確立を図る。このように自立した女性リーダーたちが、矢野望美氏とともに自社のみならず、地域に目を向け、共に発展を目指していきたいと考えている。

HP

女性が働き続けられる環境整備で経営強化を実現

徳島県で水耕栽培による葉物野菜（フリルアイスレタス、クラウドレタス、サンチュなど）を生産する農業法人カネイファームは平成25年に法人化。平成28年には農園直営レストラン「アクリエ」を開業。取引先との関係強化や新規販路開拓に活用し、現在では県内の多くのスーパーに自社商品を展開している。経営を支えるのは、代表の矢野正英氏の妻でありカネイファーム役員の矢野望美氏と女性従業員である。矢野望美氏は看護師経験を活かし、女性が働き続けられる環境づくりを重視。産休・育休制度の整備、短時間正社員制度や家族休暇の導入など、勤務の柔軟化を進め、女性が安心して働ける制度を整備。さらに、屋内外の水洗トイレ設置や作業負担を軽減する設備の導入を進め、職場環境を整備。女性が経営の中心として活躍する農業経営体へと発展している。

「見える化」された管理体制と自立した女性リーダーの活躍

矢野望美氏の経験に基づき、病院の管理体制を農業に応用し、業務の「見える化」を推進。農業事業を4部門に分け責任の所在を明確化し、スマートフォンで生育状況や品質管理データを管理できる仕組みを構築。定植率・生育状況・廃棄率などのデータを分析し、品質向上につなげている。データをクラウド上で共有することで、従業員が自らデータを分析し、考え、行動できるように促し、さらにはグローバルGAPやJGAPを取得した。

●女性のキャリア形成

女性リーダーの育成に注力。外部研修への積極参加を促し、パート職員の正社員登用や副主任への昇格を進め、女性社員のキャリア形成を促進。これにより、職場の活性化につながっている。

●外国人技能実習生の特定技能資格取得の応援、女性リーダーの育成

事業拡大に伴い、労働力確保が課題となる中、令和元年から外国人技能実習生の受け入れを開始。特定技能資格取得を応援し、取得した女性をリーダーに登用、栽培部門の管理を任せられる人材を育成。技能実習生にとっても、働きやすい環境整備に注力している。

評価ポイント 女性が働きやすい環境づくりに力を入れ、短時間正社員制度や家族休の導入など、子育てと両立できる柔軟な働き方を実現している。また、看護現場の管理体制を農業に応用し、生産のシステム化や品質管理の「見える化」を推進することで、効率的で働きやすい環境を整えている点も魅力的。農福連携や外国人技能実習生の受け入れなど、多様な人が活躍できる場を創出し、農業経営の新たな可能性を広げている。

若手女性チャレンジ部門
優秀賞
経営局長賞 受賞

和田 梢 大分県豊後大野市

私たちが地域農業を守りながら、次の世代に引き継いでいきたい

現在進行中の課題や取組

中山間地域における担い手の高齢化は深刻な問題であり、地域にある「ヒト・モノ・カネ・情報」の経営資源を最大限に有効活用するための経営戦略を立て、「自治会」や「生きがい」活動の延長から「一企業」への転換を行うことができた。

Instagram @gnakano0707/　販売サイト　HP

集落営農法人県内初の代表理事に就任し、経営改革を実践

集落営農法人「グリーン法人中野」の中心メンバーだった義父が亡くなり、農地が荒れていくのを見て、義父の想いを繋ぎたいと思い、専業主婦から就農。平成30年に大分県内の集落営農法人で初の女性代表理事に就任。経営理念を「農地を守る」から「農地を繋ぐ」に変更し、再建に取り組む。自治会的な運営だった法人経営を企業型へ転換し、重点3課題4カ年計画を策定。

❶労働力の確保

トイレや休憩所を設置して女性含む誰もが働きやすい環境を整備。さらに、社会保険の加入や週休2日制を実現。長ネギ農家との受託契約で年間作業日数を増やし、正社員の安定雇用に成功。

❷生産性向上

栽培を見直し、普及指導員の支援のもとPDCAサイクルの確立。スマート農業の一環として営農管理アプリを活用。収量コンバインを導入し、圃場ごとのデータを蓄積したことで収量の向上に貢献。

❸商圏拡大

自社生産のもち麦を使用した「もち麦マカロン」、使用済みの米袋をアップサイクルした「米袋バッグ」等を企画し、新聞、雑誌、ラジオ等のメディアに掲載。また、異業種交流を通じ大分県のウイスキー蒸留所と契約し、大麦の専属販売にも成功。クラウドファンディングを活用し「水田オーナー制度」を導入。全国から支援者を募り、作業体験イベントを実施。消費者ではなく、ファンを獲得する取組を進めている。

伝統と革新を融合し、加工品のブランド化を推進

義母が代表を務める農産加工所の後継者としても活躍。令和4年には雇用確保と事業継承を目的に「株式会社なかの家」を設立。酒まんじゅうの生産について従来の製法を守りつつ、最新設備を導入。急速冷凍機の導入や製造工程のマニュアル化を進め、安定供給体制を確立。これにより、2～9時の製造時間を3～12時に拡大し、従業員の柔軟な働き方を実現。

●販路拡大とブランド戦略

健康志向の子育て世代をターゲットに、自社オンラインショップでの通信販売を開始。さらに、観光施設と連携し、郷土菓子である石垣まんじゅうといった新商品を開発。主力商品の酒まんじゅうを「まぼろしまんじゅう」としてブランド化。パッケージについても黒色ラベルを採用し、葬祭市場へも展開。独自のマーケティング戦略により販売額を向上させた。令和4年からはふるさと納税返礼品としての提供も開始し、地域の特産品としての認知度を高めている。

地域資源の活用と次世代への継承

中山間地域の担い手不足に対応するため、3つの集落営農法人と連携し、人材・資材・機械の共有によるコスト削減に取り組む。5年後の3つの集落営農法人の経営統合を目指し、総面積40haを管理する清川地区最大の経営体としての成長を見据える。

評価ポイント 若手ながら農事組合法人の代表を務め、地域農業の発展に貢献している点が印象的である。オリジナル米袋の作成やSNSを活用した情報発信、ふるさと納税返礼品の提供など、柔軟な発想と行動力が光る。さらに、水田オーナー制度の導入や都市部との交流促進など、多角的な視点で農業の魅力を発信している。スマート農業の導入や新商品の開発にも挑戦し、地域の農業経営に新たな可能性を生み出しており、その姿勢は次世代の女性農業者にとって大きな刺激となる。

地域子育て支援部門
優秀賞
経営局長賞 受賞

ONE SLASH 株式会社（代表：清水 広行） 滋賀県長浜市

地域の農業を担う未来の力：持続可能な地域づくりへの挑戦

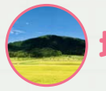
現在進行中の課題や取組

ONE SLASH / RICE IS COMEDYでは、立ち上げ当初から継続している田んぼ体験やゲリラ炊飯などの活動を軸に、地域農業の魅力を発信し続けています。これらの活動をさらに拡大するとともに、地域の新たな課題解決にも積極的に取り組んでいます。例えば、地域の新しいお祭りである提灯祭の開催を支援するなど、農業にとどまらない幅広い地域貢献を実践。今後も持続可能な地域づくりに向けた新たな挑戦を続けていきます。

ONES LASH_HP

ONE SLASH_Instagram

ONE SLASH_YouTube



地域のネガティブをポジティブに

琵琶湖最北端の町で育った幼馴染5人が平成28年に地域のネガティブをポジティブにすることを目的として、ONE SLASH株式会社を設立。その後、同年にONE SLASH株式会社のプロジェクトである、お米作りを軸とした地域活性を行う「RICE IS COMEDY」を設立。「米作りは喜劇だ」というユニークなコンセプトのもと、地域資源である「お米」を活用し、農業の可能性を広げる活動を展開。「YouTube」に「RICE IS COMEDY」のチャンネルを設置し、チャンネル登録者数は13,000人を超え、全国の視聴者と交流。また、永原小学校等の地域の小中学校で農業や地域活性・地元の潜在的能力を引き出すことに関する講演活動や平成28年から継続的に、非農業者を対象とした農業体験を通じ、農業の可能性や魅力を伝えている。また、活動の中で女性や子供が積極的に関わる仕組みを導入し、長期的な視点で女性や子どもへの支援につながる地域全体を活性化する活動を展開している。

●「ゲリラ炊飯」でおにぎりを振る舞う

一次産業や農業への「きつい、汚い、儲からない」というネガティブなイメージを払拭すべく、メンバーそれぞれの異業種での知見を活かし「ゲリラ炊飯」という取組を実施。商店街や公園などの人が集まる場所で羽釜と薪を使い炊飯し、炊きたてのおにぎりを振る舞うことで、お米の美味しさを直接伝え、農業への関心を喚起している。この活動を通じて地元米のブランド価値が向上し、販売価格は1kgあたり200円から700～1,200円へと上昇。農家の収益向上にも寄与している。

●消費者が生産に関わる仕組みの構築

農業体験イベントや田んぼオーナー制度を導入し、消費者が生産に関わる仕組みを構築。オーナーには米栽培の農業体験を提供する。収穫した米の一部を子ども食堂や被災地に寄付するなど、社会貢献にも力を入れている。

お米の新たな価値の創出

●耕作放棄地の再生と地域活性化

耕作放棄地に「レンゲ農法」を導入。土壌の肥沃度向上と景観改善を推進した結果、500aあった耕作放棄地は200aまで減少し、地元農家の意識改革を促し、作付面積の拡大につなげた。また、田植え・稲刈り体験を年間30回開催し、全国から年間600人以上が参加。農業体験を通じて地域の魅力を発信し、移住者の増加にもつながっている。

●ライスレジンの開発に挑戦

割れ米や古米をアップサイクル（再利用して新しい価値を生み出す）し、バイオマスプラスチックとして再利用する新たな可能性に挑戦。持続可能な社会の実現に向けた取組として、本取組の情報発信にも努めている。

評価ポイント 農業を子どもたちに身近に感じてもらうためのユニークな取組が印象的である。「RICE IS COMEDY」というコンセプトのもと、街中での炊飯イベントや農業体験、子ども食堂へのお米の提供、学校での講演などを通じて、農業の楽しさや地域の魅力を次世代へ伝えている。地域全体を巻き込みながら、長期的な視点で女性や子どもへの支援につながる活動を展開していることも特徴的。SNSやYouTubeを活用した情報発信にも力を入れ、農業の価値を広めながら未来の担い手の育成に貢献している。子育て支援の枠を広げ、地域の活性化を促す意義のある取組である。

女性地域社会参画部門（組織）
優秀賞
林野庁長官賞 受賞

特定非営利活動法人 SCR（代表：村上 幸枝） 宮城県富谷市

ミツバチの住む里を目指して —養蜂活動による里山再生—

現在進行中の課題や取組

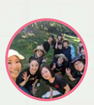
里山の未来を守るための挑戦

地域資源を活かした持続可能な里山づくりを推進。フィールドを富谷市内の大亀山森林公園へ移し、月1回のイベント開催や木育コーナーの設置を進め、地域の環境教育の場としての役割を強化している。

HP

Instagram
@npo_scr

facebook



笑顔-Smile-で楽しく挑戦-Challenge-し、人・自然・地域とつながる-Relation-

「地域に根ざし、多くの人々に喜んでもらえる活動がしたい」という想いを持つ14名の女性が集まり、平成24年に特定非営利活動法人SCRを設立。森林整備や木育活動、ミツバチ養蜂を通じて地域環境の改善と活性化に、「やってみっぺ！（やってみよう！）」の精神で挑戦を続けている。

設立当初、資金調達で始めたのが林業の手元や下草刈りのアルバイトで森林組合や林業研究グループとの出会いを契機に、間伐材の活用や森林整備の重要性を学び、林業を伝えることが自然環境保持につながるとの考えのもと木育の観点から普及啓発となる助成金活動を行うなど、実践に移した。また、森林公園や人工林の整備を手掛けるとともに、子どもたちが自然に親しむイベント「山のがっこう」や林業体験、宮城県産の間伐材を活用した木工教室を県内の林業研究グループと共催するなど、木育ワークショップなどを開催し、環境教育にも力を入れている。平成29年には地域材となる杉の間伐材の普及の推進の啓発も含め自分たちで加工した（切る）500ピースの積み木をプレゼント。自前の5,000ピースも持参して25施設に磨いて遊ぶイベントを6か月の間に開催した「積み木10,000個リレー」を行い、多くの子どもたちに木育の機会を提供。宮城県の「木づかい表彰」を平成30年に受賞した。

里山を守り、人と自然の共生を実現

平成28年からは「とみやはちみつプロジェクト」に参画。富谷市の屋上で約7万匹の西洋ミツバチを飼育。はちみつは地域の特産品として活用されるほか、教育委員会の依頼を受けた環境教育の一環としても生かされている。市内中学校では環境教育の実践の場となり、生徒たちが里山の大切さを学ぶ機会を提供している。一方で、地域の里山に設置した日本ミツバチの巣箱がクマの被害に遭うという問題に直面。そこで、休耕田の下草刈りや荒れた林縁の整備、電気柵の設置などを行い、クマと人との「緩衝地帯」を創出することで被害を防ぐことに成功した。

蜜源確保のため、休耕田でひまわりを栽培し、地域景観の向上にも貢献。こうした活動が地域住民や企業、市民ボランティアを巻き込み、地域全体の取組へと広がっている。令和5年には一般社団法人日本はちみつマスター協会が実施する「ハニー・オブ・ザ・イヤー」の日本ミツバチ部門で最優秀賞を受賞し、さらに、国産部門でもSCRが参画した「とみやはちみつプロジェクト」がベスト3に選ばれた。また、地域の障がい者施設と連携し、里山整備やミツバチ養蜂を担うことで、新たな雇用機会を創出している。

評価ポイント 地域の森林整備や木育活動、ミツバチ養蜂を通じて、里山再生と地域活性化に挑戦している点が印象的である。休耕田の活用や林縁の整備を行いながら、人と自然が共生できる環境を創出し、地域住民や企業、市民ボランティアとともに取組を広げている。さらに、環境教育にも力を入れ、子どもたちに自然と触れ合う機会を提供している点が素晴らしい。女性の力を活かしながら、地域の課題解決に向けて挑戦を続ける姿勢は、多くの示唆を与えている。

女性地域社会参画部門（個人）
優秀賞
水産庁長官賞 受賞

井本 慶子 鳥取県境港市

水産業における資源管理と女性活躍

現在進行中の課題や取組

●山陰旋網漁業協同組合の職員として魚をもっと身近に感じてもらう活動を続けている。特に、お魚教室の現場には若手職員を連れて行き、実際に子どもたちと接する機会を作っている。最初は見学から始めるが、徐々に魚の説明やレクリエーションを任せ、自分がいなくてもスムーズに進められるよう育成を進めている。子どもたちと一緒に学ぶ中で、若手職員自身も魚の魅力を再発見できる環境づくりを心がけている。

●水産業の未来を支える人材づくりにも取り組んでいる。現在、組合の活動を紹介する際のメディア対応は自分が担当することが多いが、今後は他の女性職員にも積極的に任せていきたい。テレビや新聞の取材対応、広報活動などを経験してもらい、組合の顔として自信を持って発信できる人材を育てる。女性が活躍する場を広げることで、業界全体の活性化につなげていく。

水産資源管理の最前線

平成16年に水産庁の臨時職員として勤務し、水産業界に関わり始め、「日本海沖ベニズワイガニ資源回復計画」が進行中の境港で、水産資源管理に触れる。平成19年より日本海かにかご漁業協会の専務理事として資源管理の最前線に携わる。平成20～25年に日韓民間漁業者団体間協議に参加し、水産資源の持続性と環境に配慮している事業者を審査し認証する、国際的に認められている日本発の水産エコラベルである「マリン・エコラベル・ジャパン」の生産段階認証第1号を取得。持続可能な漁業の実現に向けた活動を精力的に展開。さらに、平成29年より現在まで水産庁の水産政策審議会資源管理分科会特別委員として、TAC（漁獲可能量）の調整や資源管理基本方針の改定にも貢献。その後、令和5年に山陰旋網漁業協同組合の参事に就任。アジ・サバ・イワシ類やクロマグロ等多様な魚種の資源管理を推進している。

●魚食文化の普及と消費拡大の取組

漁業・水産業の現場で活躍されている女性が日々の生活や仕事の中で培った知恵を活かし、本プロジェクトのメンバーや企業等、さまざまな人との繋がりの中で、新たな価値を生み出し、情報を社会に広く発信することで、漁業・水産業に携わる女性の存在感を高めるとともに、女性にとって働きやすい漁業・水産業の現場改革や仕事選びの対象としての漁業・水産業の魅力向上を後押しする取組である「海の宝！水産女子の元気プロジェクト」に参加するとともに、国民の「魚離れ」を食い止めるため、魚食文化の普及・伝承に努め、魚食に関する情報発信の取組を後押しする「お魚かたりべ」としても活動。一般消費者や子どもたちに対する水産資源の理解促進のための啓発活動として、小学校やフリースクールでの出前授業を実施。実際の漁具を使った体験や漁業現場の映像を用いて資源管理の重要性を伝え、水産業への関心を高める取組を進めている。

女性リーダーとしての役割と後進の育成

水産業界における女性管理職の割合は依然として低いが、現在山陰旋網漁業協同組合の参事として管理職を務めることで、女性のキャリアパスの可能性を示している。水産庁の水産政策審議会資源管理分科会では、法律改正を含む重要な議論に参画し、水産業界の発展に貢献。平成24年から令和3年までは鳥取海区漁業調整委員として、沿岸漁業の調整にも携わった。

また、次世代の水産業を担う人材育成にも注力。魚食普及活動の知識を職員に引き継ぐため、所属する山陰旋網漁業協同組合内の教育・トレーニングを行い特に女性職員の活躍を推進し、リーダーシップを発揮できる環境づくりに注力。メンターシッププログラムの導入を計画中であり、女性職員が自信を持ってキャリアを築けるよう支援を行う。

評価ポイント 長年にわたって資源管理や漁業政策に携わり、持続可能な漁業の実現に貢献している。漁業協同組合の参事として業務全般を担いながら、女性のキャリア形成を支援し、次世代の人材育成にも力を注いでいる。さらに、魚食文化の普及活動を積極的に行い、教育現場での出前授業を通じて水産業への関心を高めている点が素晴らしい。女性リーダーとして新たな道を切り拓き、業界の発展に貢献する姿勢は、多くの示唆を与えている。

女性地域社会参画部門（個人）
優良賞
全国農業協同組合中央会長賞 受賞

佐藤 美登子 北海道厚沢部町

厚沢部町、そして道南地域全体の農業を支える農協女性部員兼農業委員

現在進行中の課題や取組

地域の未来を担う世代へ、農業と食の大切さを伝える

厚沢部町をはじめとした道内各地域では、少子高齢化等によって地域で活躍する農業者が減少傾向にあり、地域農業の衰退が懸念されている。

これからも町の農業委員及び地域農業の相談役として、担い手確保や農地の斡旋に引き続き取り組む。また、JA女性部の活動では、従来から行っているフードバンクと連携した食材提供の取組を継続するとともに、従来からの活動の発展形として、子ども食堂の開設に向けた取組を進めていく。

地域農産物の価値を伝え、女性農業者の交流を推進

昭和60年に厚沢部町で夫の家業である農業を継ぐ形で就農。JA新はこだて厚沢部地区女性部に所属し、味噌・漬物などの加工品づくりや、地域の伝統料理である「かたこもち」の継承活動に取り組む。また、地域産大豆を使った減塩味噌を製造し、道の駅やJA新はこだて直売所「あぐりへい屋」などで販売している。地区女性部が製造する加工品は健康に配慮した減塩志向のものであり、道南各地からのリピーターが増えている。

●女性農業者の世代間交流と地域づくりへの反映

厚沢部地域の女性農業者同士の交流を深めるため、町内の若手女性グループに各種イベント等への参加の呼びかけを行うなど、交流の場づくりを積極的に行っている。このことを通じて、厚沢部地域では女性農業者同士の情報共有が積極的に行われるとともに、世代を超えたつながりが生み出されている。この活動によって、厚沢部町では女性が活躍しやすい地域社会が形成されているだけでなく、世代を超えた女性農業者同士の交流の場が作られることで、女性農業者が持つ不安や悩みの解消が図られており、女性農業者からも「人との絆づくりができる」などの声が多く上がっている。また、JAや町内部の委員会活動を通して得たノウハウを地域とのつながりを生かして他の女性農業者へ積極的に共有するほか、女性農業者側から出た意見を町の各種会議や委員会等に伝えるなど、女性農業者の声が届きやすい地域づくりにも貢献している。

厚沢部地域をつなぎ、農業の未来を育む

厚沢部町の農業委員として平成26年から4期にわたり活動しており、農地集積や高齢化の課題にも取り組むかたわら、女性農業者の声を町や委員会、JAへ繋ぐ活動を行っている。また、地域農業の次代を担う農業者を確保することの重要性を訴え、就農希望者に対する町の受け入れ体制の見直しに携わっており、見直しの結果として短期の農業研修が新たに開始されるなど、厚沢部町農業における担い手確保の体制に大きな変化をもたらし、同町における新規就農者数の増加に貢献している。

さらに、地域おこし協力隊と連携し、地元産食材を活用した加工品の試作や農業体験イベントに携わるなど、協力隊員の相談役としても精力的に活動している。

●道南地域の農業活性化

平成31年、JA新はこだて女性部の部長に就任。各地域の農業団体や行政などが携わる道南地域の農業振興計画の策定に同部の部長として参画し、地域の女性農業者の声を伝えているほか、JA新はこだて女性部の各種研修会や本州のJA女性部との意見交換などを通して、道南地域の農業振興・女性農業者の活躍推進にも尽力している。さらに、令和3年からは北海道農協米対策本部委員として、北海道産米の知名度向上・地産地消の推進にも取り組んでおり、道南地域のみならず北海道全体の農業分野における女性リーダーとして、地域農業の発展に貢献している。

評価ポイント 女性農業者の交流の場をつくり、世代を超えたつながりを生み出している点が印象的である。特に、若い世代の就農希望者を受け入れる体制の見直しを提言し、具体的な変化を生み出している点が素晴らしい。長年にわたり女性組織の中心的存在として活動し、農業委員や審議会委員としても積極的に関わり、地域の農業振興に貢献している。農業の現場で女性が活躍する機会を広げ、男女共同参画の推進にもつながる取組を進めており、その姿勢は多くの示唆を与えている。

女性地域社会参画部門（組織）
優良賞
全国漁業協同組合連合会長賞 受賞

両開漁業協同組合 女性部（代表：田中 恵美子） 福岡県柳川市

女性部40年の歴史が生み出した一品
―海苔の佃煮販売事業の歩み―

現在進行中の課題や取組

近年ではECサイトの普及により生産者と消費者との距離が近くなったことで、地元のみならず、全国、海外との取引が容易になり、販売先の拡大が期待できる。そのためには、製造元としての漁協の信頼性や商品の安全性を高める衛生管理、多様化した消費者ニーズに応える商品開発が重要となる。
衛生管理においては商品の品質、安全性を高めるために、稼働中の漁協工場は、平成29年からHACCP相当の衛生基準になるよう改修し、日本の大手食品会社との取引だけでなく、海外との取引にも対応できるよう、取組を行っている。

海苔養殖最大の危機に女性部が力を発揮

昭和58年、国内海苔の過剰供給により単価が低下し、板海苔の原価割れが発生する中、女性部は原藻を活用した佃煮の製造に乗り出し、新たな販路開拓を目指した。商品開発では、海苔本来の風味と食感を生かし、余分な添加物を使わずに原藻を活用することで、滑らかな食感を実現。試行錯誤を重ね、昭和61年に商品化に成功。販売当初は販路がなく、地元イベントで試食販売を実施。口コミで評判が広がり、地元スーパーや百貨店での販売につながった。さらに、九州から関東へと全国展開を進め、販売開始翌年には売上2,000万円、平成5年には1億円を達成した。

消費者のニーズを捉え再起

売上拡大後も市場開拓を進め、贈答用「最高級佃煮　有明のり」を開発。他社の高品質の佃煮の成功を参考に、柔らかい「一番摘み」を使用し、洗浄・冷凍方法を改良。漁協の若手生産者と協力し、品質向上に取り組んだ。大量生産は困難だったが、ブランド力向上につながり、都心の百貨店での販売が拡大した。

●小袋パックを開発

平成14年頃から売上が減少に転じたため、消費者ニーズを分析した。その中で「瓶の処理に困る」「期限内に食べきれない」という声を受け、小袋パックを開発。食べ方の汎用性を高め、ヒット商品となる。会葬御礼品や学校給食にも採用され、新たな市場を開拓した。人気拡大に伴い、パッケージング設備を導入し、自社運営に切り替えることでコスト削減を実現し、安定した事業運営を確立。

●食卓の定番の座を獲得

平成24年から漁協敷地内駐車場等で「新のりフェア」販売会を開催。フェアでは地元を中心に安定した売上を維持し、女性部も参加して佃煮を販売。全国的な販路拡大に加え、地元を重視した地道な活動を続けたことで、食卓の定番として定着。その結果、収入等のリスク分散につながり、令和のコロナ禍を乗り超えた。

評価ポイント 海苔養殖の厳しい状況の中、新たな価値を生み出そうと女性部が主体的に商品開発に挑戦し、販路を広げてきた点が印象的である。海苔本来の風味を活かした佃煮の開発では、試行錯誤を重ねながら品質向上に努め、他社との差別化に成功。さらに、地元イベントでの試食販売を積極的に行い、全国展開へとつなげた。市場の変化に対応しながら新商品開発を続け、事業の継続と地域雇用の創出にも貢献。女性の力を活かし、地域に根ざした取組を発展させている。

女性地域社会参画部門（組織）
優良賞
大日本水産会長賞 受賞

株式会社 漁村女性グループめばる（代表：小谷 晃文） 大分県佐伯市

「ごまだし」が繋ぐ人と人、人と地域
～事業承継を果たした漁村女性起業の働き方がもたらすもの～

現在進行中の課題や取組

伝統文化の継承と新たな挑戦

不漁対策として、原料の代替の季節のお魚「ゴマだし＋」を開発、地域の高齢化によりごまだしの取扱店が減少したことからOEMの受注を強化し、ごまだし文化の継承と販路拡大を推進。

HP

Facebook

Instagram
@gomadashi.mebaru

漁村女性による起業と伝統調味料「ごまだし」の商品化

「父ちゃんたちが命懸けで獲ってきた魚の値段を上げたい」「魚離れが進む中で、地元の新鮮な魚の美味しさを消費者に伝えたい」。その想いから、平成19年に「漁村女性グループめばる」が発足した。当初は朝一で活魚を販売したが、消費者の購入につながらず苦戦。そこで地域に愛される「ごまだし」（エソなどの魚とゴマをすり潰し醤油等を加えた調味料）に着目し、製造販売を開始した。やがて「めばる」の活動は、市町村合併が進む中での地域活性化と、漁村女性や退職した漁業者の就業機会創出にも寄与することとなった。

●万能調味料としての「ごまだし」がヒット

平成24年、日本野菜ソムリエ協会主催の調味料選手権で株式会社漁村女性グループめばるが生産した「ごまだし」が最優秀賞を受賞。平成26年にはレシピ本を出版し、「ごまだし」の使い方を広めることで消費者への訴求力を高めた。また、平成29年からインターナショナルシーフードショーなどの商談会へ積極的に参加し、全国展開を実現。現在では成城石井、DEAN&DELUCA、無印良品などの大手小売店で販売されるとともに、全国放送のテレビや雑誌にも多数取り上げられ、知名度が向上した。「めばる」を立ち上げた前代表の桑原政子氏にとって、「ごまだし」の生産は、「フレアスカートをはいて台所に立っていた普通の主婦の私を社会に出してくれた」ものであった。

事業承継と地域雇用の創出

全国的に販路を拡大した「株式会社漁村女性グループめばる」に事業承継の時期が訪れ、大分県事業引継ぎ支援センターを通じて令和3年に「株式会社漁村女性グループ」と現代表の小谷晃文が出会う。小谷氏は水産養殖研究所に勤務し単身赴任生活を余儀なくされる中、家族との時間を優先するため、地元大分へのUターンを決意し、「めばる」の工場長として勤務。令和4年に事業承継し小谷が代表に就任。小谷にとって、この出会いは「自身を家庭や地域に返してくれるきっかけ」となった。

●事業承継のロールモデルとしての活動

地域雇用の拡大に力を入れ、子育て層の雇用を促進。地域で漁獲される価格のつかない魚（シイラなど）を活用し、魚価向上と地元水産業の支援に貢献。発足当初から行ってきた子どもたちへの魚食普及活動も大切に継承している。全国的に漁村女性グループの後継者不足が課題となる中、性別にとらわれず、組織外人材による事業承継の成功事例として注目される。

評価ポイント 漁村女性が主体となり、地域伝統の調味料「ごまだし」をブランド化し、新たな市場を開拓した点が印象的である。魚価向上や魚食普及を目的に活動を続け、全国展開を実現。品評会での受賞や大手小売店での販売など、その成果も大きい。さらに、事業承継を通じて地域の雇用を創出し、漁業資源を活かした持続可能な事業モデルを築いている点も素晴らしい。漁村女性の活躍を広げるとともに、地域水産業の発展に貢献する姿勢が、多くの示唆を与えている。

女性地域社会参画部門（個人）
優良賞
農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 受賞

福嶋 求仁子 熊本県合志市

調和と強調でねばり強く女性活躍社会の実現へ

現在進行中の課題や取組

女性農業委員や女性会長も増えているが、30%の登用を目指してさらなる推進が必要。くまもと農業委員会女性委員の会の組織代表として、様々な会合等に参加できる機会を増やし、発言力を持ち、決定に寄与できる体制づくりが重要。また、JAの理事や農業委員以外の土地改良区等の役職への女性登用も必要。さらに、今後の農業の担い手確保のための目標地図の作成に取り組み、地域がより元気で住みやすい町になるよう力を入れていきたい。

地域と農業をつなぐ女性リーダーとしての挑戦

父の農地を継承し一人で就農。夫は定年退職後に就農し、現在は二人三脚でアスパラガスを中心に減農薬米や小麦、季節の野菜を栽培している。自然食品取扱店との取引を通じ、高い評価を得ており、減農薬米は全量を地元の家庭や病院へ直接販売している。

●地域と農業をつなぐ「元気の森の元気市」

農業経営と並行して地域活性化にも注力し、平成21年より毎月第4日曜日に地域住民が元気の森公園で農産物を販売する「元気の森の元気市」を開催。就農前に転勤先の高知県高知市で見た活気ある朝市を参考に、地産地消と地域交流の場を創出した。現在では年間を通して千人近くが訪れる朝市へと成長。高齢者の買い物や地域のコミュニティの場としても機能。出店者は若い女性も多く、農作物の販売のみならず地元農産物を使った加工品販売の場としても活用が広がっている。

●食農教育の推進と食文化の継承

20年前から地域の子どもたちを対象に、田んぼでのどろんこ遊びと収穫したお米を食べる体験を提供。農業と結びつけた学びの場を創出している。平成25年からは合志市学校給食用野菜出荷組合に所属。令和4年には組合長に就任し、地産地消と食育を推進。また、熊本県が食文化の伝承等を目的に実施する「くまもとふるさと食の名人」として郷土料理の伝承活動を展開。アスパラガスのレシピ提供や市施設の食堂で「あんもちだご汁」の提供などを通じ、食文化の理解促進に努めている。

農業委員会の変革の必要性と新規就農支援の拡充

平成18年に農業委員に就任し、現在6期目。平成31年に合志市初の女性農業委員会長として就任、農地の集積・集約化を推進。地域農業の未来についての話し合いの場を設け、農地の有効活用を進めている。

●女性農業委員の登用30%以上を目指す取組

女性の農業参画をさらに推進するため、平成25年から休止していた「くまもと農業委員会女性委員の会」を令和元年に再始動。会長として女性農業委員の登用拡大を推進し、令和5年度までに、県内の女性農業委員は106名、女性農業委員会長は5名に増加した。また、九州各県で女性登用等に関する講演活動を行い、女性農業者の発言力や表現力の向上を支援。さらに、農業委員の選考基準統一化を提案し、女性登用の促進を図る。

●男女共同参画の推進と女性の働き方改革

令和4年に熊本県「くまもと農山漁村男女共同参画推進会議委員」に就任し、農業・林業・漁業における女性の労働環境改善を発信。子育てや看護休暇の保障が不十分な現状を訴え、女性が働きやすい環境整備を進めている。

●定年退職後の就農支援と新たな指標づくり

定年退職後に就農した夫の経験をもとに、60歳以上での新規就農のモデルを確立し、国や県に中高年就農者に対する支援拡充を働きかけている。

評価ポイント

農業振興において、男女の垣根なく当たり前のように取組を進めている姿勢が印象的である。研修会後のアンケートを活用し、理解促進を図るなど、細やかな心配りを実施している。単に「女性が頑張っている」という枠を超え、取組そのものが優れたものとなっている。また、定年退職後の就農をロールモデルとして示し、産地の継続や発展に貢献している。地域農業の未来を見据えた取組が、多くの人にとって示唆に富むものである。

女性地域社会参画部門（個人）
優良賞
農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 受賞

三浦 悦子 宮城県気仙沼市

一歩を踏み出す力

現在進行中の課題や取組

男女共同参画社会の発展に向けて、宮城県では、農業委員に占める女性の割合を令和7年までに30%にする目標を掲げています。会長職に就任する女性委員も増加していますが、女性が農業委員に立候補するケースは少ないのが現状です。解決策の一つは、女性の立候補に対する家族や周囲の理解と協力です。今回の改選では、女性候補者とその夫の二人を同時に説得した結果、了解いただき、成果を得ることができました。

さらに、農業委員会業務の改善・工夫も必要です。女性に限らず、誰もが働きやすい環境にするため、他市町村農業委員会から情報収集を始めたところですが、このような取組を着実に進め、男女共同参画社会の実現を目指したいと思います。

農業経営と地域活動の推進

結婚後に地元企業に就職したが、夫の勤務先の海外駐在を経て帰国後、夫の両親から養鶏業の継承を打診され、昭和60年に就農。平成13年に認定農業者となり、鶏舎を更新。雛を一斉に鶏舎に入れて飼養した後（オールイン）、一斉に出荷し（オールアウト）、鶏舎を空にして消毒、一定期間をおいた後、再び雛を鶏舎に入れる「オールインオールアウト方式」を採用し、防疫対策の強化や作業効率を向上。年間9万羽を出荷し、安定した農業経営を確立した。

●「川内ブロイラー婦人部」を結成

平成元年にブロイラー生産組合の婦人6人による川内ブロイラー婦人部を結成し、朝市夕市といった地元イベントに参加し地域との交流を深め、養鶏業への理解を広めた。また、その後、気仙沼市本吉地区農村生活研究グループ連絡協議会に加入し、地域食材の活用、地産地消、加工技術の伝承など農村の豊かな生活の維持や地域の活性化に貢献。平成12年には同協議会の会長、続いて宮城県農村生活研究グループ連絡協議会の会長に就任し、女性のネットワークづくりと社会参画を積極的に推進した。

農業委員会と議員活動を通じ地域の課題と女性活躍推進に取り組む

平成13年に本吉町農業委員会初の女性委員に就任し、遊休農地の解消や農地の適正利用に取り組んだ。平成17年には本吉町議会議員に当選し、女性の視点や発想を政治につなぎ女性の声を政策に反映する取組を行うとともに、全国の女性市町村議員との交流を通じてさらに視野を広げることができた。平成24年に気仙沼市農業委員会初の女性委員に就任し、女性農業委員登用を推進した。女性農業者の地位向上に取り組む「みやぎアグリレディス21」の副会長として市長や議長に対し、要請活動を行い、県内すべての農業委員会で女性委員が選出される成果を上げた。平成30年に気仙沼市農業委員会会長職務代理者に就任、令和6年には会長に就任。女性農業委員の増加に向けた取組を継続した結果、同年の改選で女性農業委員が2名から3名に、農地利用最適化推進委員が0名から2名に増加した。農業委員会の役割は多岐にわたり、委員同士の連携が不可欠である。農業委員としてリーダーシップを発揮し、男女共同参画社会の実現を推進。

女性活躍推進のために必要なこと

認定農業者となり農業経営に主体的に参画する意識を持ったことで、経営の意思決定において夫と対等な関係（パートナーシップ）を構築することができ、その後の農業委員をはじめとする農業・地域に関する様々な活動と家庭生活の両立に対して、家族の理解と惜しみない協力を得ることができたと認識。その結果、今日まで積極的に男女共同参画社会の実現の旗振り役を努めることができている。今後も女性農業者が自身の能力を発揮でき、生き生きと活躍できる環境整備に注力していく目標を持っている。

評価ポイント

農業経営から社会参画へと着実に歩みを進め、女性が意思決定の場に関わる道を切り拓いてきた点が印象的である。農業委員として仲間を増やしながら、組織を横断してリーダーシップを発揮し、農村における女性の参画を推進してきた。さらに、町議会議員として政治の場にも関わり、幅広い視点で地域の発展に貢献している点が素晴らしい。女性農業委員の育成やネットワークづくりにも尽力し、地域社会の中で女性が主体的に活躍する環境を築いてきた。

女性地域社会参画部門（組織）
優良賞
農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 受賞

山梨きら星ネット（代表：齊藤 眞知子） 山梨県南アルプス市

時流に合わせた女性農業者視点の活動

現在進行中の課題や取組

- 今まで廃棄してきた未熟ぶどうを搾汁（ヴェルジュ）して調味料・飲料などの商品化の検討
- 直売所を設立運営している女性農家が高齢化に伴い継続・継承に向けた今後の検討、勉強会
- 4パーミル・イニシアチブについての勉強会

※4パーミル・イニシアチブとは、世界の土壌表層の炭素量を年間4パーミル増加させることができれば、人間の経済活動などによって増加する大気中の二酸化炭素を実質ゼロにすることができるという考え方で、農業分野から脱炭素社会の実現を目指す取組。

Instagram
@yamanashi.kiraboshi

Facebook

女性農業者のネットワークを構築

「山梨きら星ネット」は、山梨県が農村リーダー育成を目的に実施した研修の修了生を母体に、平成19年3月に設立。県内の中北・峡南・峡東・富士東部の会員で構成され、現在は40名で活動。農業者のネットワークを広げつつ、会員の資質向上と親睦を深めている。山梨県の農業は標高や気候によって特色が異なり、果樹・高原野菜・穀物・酪農など多様な生産者が集まる。営農技術だけでなく、女性が各年代に直面する育児や介護などについても情報交換を通じて相互理解を深め、設立当初から「山梨県農業まつり」への出店や、POP作成技術やSNSの利活用、事業承継に関する専門家を招いた講演会、県外視察研修を継続。平成24年度には農林水産省の支援事業を活用し、消費者や地元農産物を使用したサービスを提供する飲食店・加工業者などの法人とのネットワークを構築し、農業の大変さと楽しさを知ってもらい、職業として農業を選択する次世代の担い手を育成した。会員が農業経営や6次産業化を学び、知識や経験の共有することで地域農業の発展に貢献している。

農業経営の多様化と持続可能な農業経営への取組

担い手の減少や物流問題を含めた販路開拓、農業の担い手不足、事業承継の課題に対応するため、各種研修およびトラクターや刈払機の講習、農薬の使用講習を行っている。農家に嫁いだ女性に加え、県内外から移住し単身で営農する女性も増加しており、世代や営農の目的・形態が異なる会員が増える中、会員同士のコミュニケーションを図り、情報共有や技術研修を継続的に実施。販売形態が市場への出荷から消費者に直接つながる通信販売やSNS、アプリを活用した全国規模の販売へと変化していることから、時代の変化に対応し、販売促進・販路拡大のスキル向上も支援している。

平成26年から29年には、農村女性による地域農業の活性化を目的として、地域ブロック毎に都市農村交流ツアーを開催。各地域の特色ある農産物の加工体験や農家の人たちとの交流を通じて農村の魅力を発信し、地域振興を積極的に行い、農山漁村の活性化にも大きく貢献。また、更なる経営向上を目指し、会員それぞれが生産する品目の違いを活かして、農家と飲食店・食品加工業者のマッチング会を開催したり、物流企業（やさいバス東海）との意見交換を行い、新たな販路の開拓や知識、技術の習得を進めている。

評価ポイント 農業の分野を超えたネットワークを形成し、女性が主体的に地域社会へ参画するモデルを築いている点が印象的である。品目を超えた勉強会を開催し、経営力向上や人手不足の解消、生活形態に合わせた働き方の整備、販路拡大など、5年後を見据えた計画を策定している。また、加工業者とのマッチング機能を活用し、販売先との関係構築にもつなげている。県全体での取組へと発展し、行政の支援を受けつつ自走し始めた点も、地域活性化の好事例となっている。

女性活躍経営体部門
優良賞
農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 受賞

株式会社 アグリシアJAPAN（代表：津田 乃梨子・津田 壮一郎） 千葉県富里市

スタッフと共に農園を成長させ、地域に愛される農園に！

現在進行中の課題や取組

経営規模の拡大と社員の人材育成で さらなる経営発展と富里市農業のPR

今後もスタッフと共に楽しくやりがいをもって農業に従事していきたい。

安定した強い農業経営を目指し、引き続き規模拡大し売上に反映させる。好評な観光農園（いちご）は面積拡大と全量直売で、露地野菜は各品目で作付けを拡大し、直売の割合を高めていく。併せて新規顧客の確保、販路拡大の取組も進めている。

社員の安定雇用に繋がるよう就業条件整備や人材育成を今後も進め、より働きやすい環境を整えていく。また、市内生産者が連携してのイベント開催や情報発信を継続的に行い、地域農業を盛り上げていきたい。

Instagram
津田農園

HP

Facebook

農業経営の確立と地域資源の活用

大学卒業後にフードサービス業に就職したことをきっかけに国産野菜への関心が高まり、平成21年に退職し両親の経営する津田農園に夫と共に就農した。平成23年に経営移譲を受け本格的に農業経営を開始。先輩農家やJA、農業事務所の指導を受けて経営を拡大していき、平成29年から雇用を導入し、労働力確保に取り組んできた。

差別化を図るために販売戦略を工夫し、令和2年には独自ブランド「アグリシアJAPAN」を立ち上げ、「日本に蒔こう、しあわせの種」を理念とした。ホームページを作成、ECによる販売も開始し、令和3年には法人化した。

令和4年からいちごの高設栽培を開始。同年、販売ブランドを「津田農園」とし、直売所の運営や加工品開発に取り組む。同時期から女性スタッフの雇用を拡大。接客力向上やオリジナルパッケージの開発を進め、購入リピーターの獲得に努めている。さらに観光農園としての機能を充実させている。

女性が仕事への情熱をもって働ける環境づくり

女性が働きやすい環境を整備するために、育児・介護休暇制度や短時間勤務制度を導入。小学校の長期休暇中の子供を連れての出勤の推奨や、作業負担軽減のため機械化を推進している。女性スタッフに配慮した更衣室や休憩所の整備を行い、快適な職場環境を提供し定着率を高めている。また、研修参加や資格取得を支援し、やりがいを持って仕事に取り組めるようにしている。

情報共有アプリや業務ノートを活用して業務の効率化を図りつつ、スタッフ間のコミュニケーションの場としても役立っている。

SNSで農業の魅力を発信することにより、農園のアピールと共に、職場の様子を見られることで安心して応募できる点が求人にも効果的である。

女性社員が部門責任者を務め、販売ミーティングを実施。ブランディングの専門家を講師に招き、販売戦略・接客・ディスプレイに関する研修も実施した。オリジナルパッケージのデザイン検討では、消費者目線を持つ女性スタッフがアイデアを出し合い、「かわいさ」と「機能性」を両立させたデザインを開発。仕事への情熱と農業愛が深まった。

地域との連携

地元小学校の圃場見学受け入れや、地域の特別支援学校や福祉事業所との農福連携によって、地域と共にある農園として認知されてきている。

また、市内のいちご生産者に協力を促し、直売所がわかる「いちごマップ」を制作したり、いちごの直売といちごのスイーツなどの販売を行う「いちごフェスティバル」を企画開催し、観光協会や商工会、富里市と連携し、地域活性化に貢献している。

評価ポイント 農業経営の確立と地域資源の活用を進め、女性が活躍できる環境づくりにも力を入れている点が印象的である。育児や介護に配慮した柔軟な勤務制度を整備し、働きやすい職場環境を構築。さらに、機械化の導入や施設整備を行い、負担軽減と効率向上を実現している。地域連携にも積極的に、食農教育や農福連携を推進し、地域の農業振興に貢献。観光農園の機能を生かしながら新たなブランド価値を創出する姿勢が、地域活性化の好事例となっている。

若手女性チャレンジ部門
優良賞
農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 受賞

合同会社 十色（代表：サカール 祥子） 埼玉県さいたま市

とうがらし×地域連携×農福連携 若手女性3人のスタートアップ

現在進行中の課題や取組

次世代に農業をつなぐため県内学校との連携を行っている。城北埼玉高校とのコラボ商品「16才の柚子胡椒」の取組は3年目となり、シリーズ品の開発などに発展。
食文化の観点から、畑での見学会や各国料理のイベントを開催。また「さいたまヨーロッパ野菜研究会」に所属し、西洋野菜の地産地消、食育に取り組んでいる。
農業体験では新たに企業向けの農業を通したチームビルディング研修を企画。リアルなコミュニケーションが不足する社会人に農業を通した交流の場を提供していく。

Instagram
@toiro.farm

HP　農業体験イベント　食べチョク

福祉農園の週末ボランティア活動がきっかけで出会った女性3人での起業

さいたま市内にある「見沼田んぼを活用した農業で、多様な人が活躍できる場をつくりたい」という思いが一致した女性3名が令和3年に農業法人「合同会社十色」を設立。とうがらし専門農園の運営と農業体験事業を主軸に活動。代表のサカール祥子氏は、東京農業大学大学院で造園学を専攻し、福祉農園でのボランティア活動や障害福祉施設での就労支援を経験。役員の釘宮葵氏は、ネパール・タンザニアでのボランティア活動を経験後、IT企業勤務を経て、現在は十色をメインに活動しながら、IT企業にも籍を置き、副業を行っている。松葉早智氏は、自衛隊勤務や海外経験を経てシンクタンクに勤務しながら活動を両立。異なる分野での経験や知見を活かし、地域農業の高齢化や休耕地の増加といった課題解決に取り組んでいる。

とうがらしに着目した専門農園で持続可能な農業を拓く

●技術確立と認証取得
世界的に需要の高いとうがらしに着目し、約40種類を栽培。さいたま農林振興センターや種苗会社と連携しながら技術を確立し、有機JAS認証の取得を目指している。ベトナムの有機栽培事例を参考に、環境負荷の少ない農業に取り組む。

●6次産業化と販路の確保
県内の事業者や学校と連携し、加工品を開発。株式会社ノースコーポレーションとのコラボである「秩父黄金カボスコ」は令和4年「にっぽんの宝物JAPANグランプリ」準グランプリ、令和6年「Made in SAITAMA優良加工食品大賞」特別賞を受賞し、認知度向上にも成功。

●農業体験
親子向け農業体験プログラムを実施し、水稲や小麦の栽培農業体験、自然観察を組み合わせた企画を展開。令和5年度には延べ2,457人が参加し、農業と環境について学ぶ機会を提供した。

多様な働き方の提供で雇用の安定確保

設立当初より各々のライフスタイルに合わせた柔軟な働き方と、働きやすい環境整備に取り組む。現在13名が働いているが、早朝や土日等の短時間勤務を可能にし、子育て世代や、家庭の都合、Wワーク希望等の雇用機会を創出。事務作業のリモートワークや柔軟なシフト勤務体制を整備。また、市内の福祉施設と連携し、障害者の就労支援を実施している。とうがらしを軸に、地域農業の持続可能な発展と多様な人々が活躍できる社会の実現を目指し、これからも挑戦を続ける。

評価ポイント
農業への新しいアプローチを示しながら、地域とのつながりを広げている点が印象的である。とうがらし専門農園の運営と農業体験を軸に、農業の可能性を多様な形で発信。農福連携を活かした就労支援や、短時間勤務など柔軟な働き方を取り入れ、多様な人が活躍できる場を創出している。さらに、6次産業化を進め、加工品開発や販路拡大にも積極的に取り組む姿勢が素晴らしい。都市と地域をつなぐ新たなモデルとして、今後の展開が期待される。

農山漁村女性の日

農林水産省では、農林水産業・農山漁村の発展に向け、女性が農林水産業の重要な担い手として、より一層能力を発揮していくことを促進するために、毎年3月10日を「農山漁村女性の日」と設定しています。
「農山漁村女性の日」が3月10日とされたのは、農作業が比較的少なく社会生活においても女性が学習や話し合いを共にする条件が整っていることに加え、農山漁村女性の3つの能力（知恵、技、経験）をトータル（10）に発揮してほしいという願いも込められています。

農林水産省「農山漁村女性の日」
https://www.maff.go.jp/j/keiei/jyosei/josei310.html

農業女子プロジェクト

女性農業者が日々の生活や仕事、自然との関わりの中で培った知恵を様々な企業の技術・ノウハウ・アイデアなどと結びつけ新たな商品やサービス、情報を創造し、社会に広く発信し、農業で活躍する女性の姿を多くの皆さまに知っていただくための取組です。

農業女子プロジェクト公式HP
https://nougyoujoshi.maff.go.jp/

Instagram　Facebook

女性農業者のための学習コンテンツ＆お役立ち情報サイト（株式会社マイファーム）

ご自身や職場で学べる研修コンテンツ、女性が働きやすい環境づくりをサポートする補助制度、女性農業者の活躍／推進事例などの情報をお届けしています。

株式会社マイファーム
「女性農業者のための学習コンテンツ＆お役立ち情報サイト」
https://myfarm.co.jp/women/

農山漁村女性活躍表彰
［発行者：運営主体］株式会社マイファーム
〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町607番地 辰巳ビル1階
TEL：050-3343-7441　MAIL：mfaward_r04@myfarm.co.jp

農山漁村男女共同参画推進協議会
［事務局］一般社団法人 全国農業協同組合中央会 JA改革・組織基盤対策部
一般社団法人 全国農業会議所 経営・人材対策部
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル２階
(一社)全国農業会議所内　TEL：03-6910-1124　FAX：03-3265-5140
https://www.nca.or.jp/support/farmers/common/

農山漁村男女共同参画推進協議会とは…
農山漁村女性の社会参画及び運営参画を推進し、男女共同参画社会の実現に取り組む任意団体です。
【構成団体】ＪＡ全国女性組織協議会／一般社団法人全国農業会議所／一般社団法人全国農業改良普及支援協会
全国林業研究グループ連絡協議会女性会議／全国漁協女性部連絡協議会／公益社団法人日本農業法人協会

本資料は、農林水産省補助事業「令和６年度担い手育成・確保等対策事業費補助金等(女性が変える未来の農業推進事業)」の一環として制作しました。